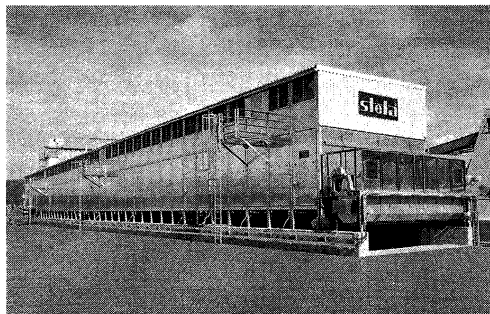


工場排熱で燃料チップを乾燥

ドイツ・ステラのドライヤー販促

兼松K GK



チリのメーカーに納入された大型タイプ

工作機械や産業機械の専門商社、兼松K GK（東京都、千葉靖雄社長）は、比較的低温の工場排熱を回収して木質チップ等の燃料を乾燥する「低温ベルトドライヤー」の販売に力を入れている。同社はドイツのドライヤー専門メーカーであるステラの日本代理店で、日本の木質ボードメーカーやバイオオマス発電施設向けなどに、これまで使わなかった工場排熱等を有効活用し、原材料乾燥などに用いることを提案している。来夏には日本第1号基が納品できる見通しだ。

ステラのドライヤーは世界で約3500基以上の納入実績があり、木質ボードやバイオオマス発電施設には140基ほど活用されている。

通常、木材加工工場（チップ等）へ吹きかけでは60〜100℃の廃温水や排熱は廃棄してしまうが、この低温ベルトドライヤーはこの廃棄する熱を熱源に利用する。廃温水なら80〜100℃を生かせるほか、ボイラやプレス、煙突などの排熱を集めて熱源にもできる。

原料の水分を奪った温風は排気ファンから湿った空気を出すのが、ダクトのフィルターを通るため煤塵量の低下にもつなげることができ。乾燥された原料もドライヤー装置の排出スクリーンから出る

分を計測し、ドライヤー内のベルトスピードに反映させる。工場内での使用方法は主に3つ。小型タイプなら主力ドライヤーの予備用（納入事例Ⅱクロノプライ）、大型タイプならメインドライヤー（同Ⅱアラウコ）、そして燃料チップ乾燥とボイラ集塵設備を兼ねる（同Ⅱバイオエネルギー）こともできる。

取する場合は熱交換器で温風を出し、排熱を回収する場合は直接、温風を原料

場風を原料が、ここで含水計で水分を計測し、ドライヤー内のベルトスピードに反映させる。工場内での使用方法は主に3つ。小型タイプなら主力ドライヤーの予備用（納入事例Ⅱクロノプライ）、大型タイプならメインドライヤー（同Ⅱアラウコ）、そして燃料チップ乾燥とボイラ集塵設備を兼ねる（同Ⅱバイオエネルギー）こともできる。

蒸発能力はドライヤーのベルト幅と長さで異なるが、小型タイプ（蒸発量Ⅱ1・95トン/時、ベルト幅6・2メートル）なら時間当たり5

・85トンのチップ（含水率50%）を投入すると、含水率25%のチップを時間当たり3・9トン生産できる。

販売価格は、最小サイズとなるベルト幅3メートル、長さ10メートルで、蒸発量1・2〜1・3トン/時で約1億円が目安

となる。セクションの増減でドライヤー拡張が容易になるほか、マインナス40℃以下の寒冷地でも設置が可能とい

兼松K GKでは、年間1〜2基を日本国内で販売する目標を掲げている。来夏に1号機を納入予定だが、バイオオマス発電事業者から、燃料チップや木質ペレット原料の事前乾燥用ドライヤーとしても注目されている。